日本教育新聞
創刊 1946(昭和21)年5月1日
発行所
日本教育新聞社
〒105-8436
東京都港区虎ノ門1-2-8
電話03(5510)7777(大代表)
郵便振替 00150-8-196500
©日本教育新聞社 2016
ご購読申し込み ☎03(5510)7828 Eメール kodoku@kyoiku-press.co.jp
ホームページ http://www.kyoiku-press.co.jp

N Web このマーク表示のある記事については、ご愛読者に限り、ホームページ上でさらに理解を深めるための資料を閲覧することができます。

発表児童に目を向ける子どもたち。気持ちも学習に向かっている表れだ

主体的・協働的に考え、学ぶ力

各教科領域 司会役を立て話し合い

これからの社会の変化に対応する力を培うため、指導方法の一つとして、アクティブ・ラーニングが注目されている。主体的・協働的な学びとも言われ、次期学習指導要領改訂の目玉。校種による温度差も指摘されるが、学校では、今、こんな取り組みが進行中だ。

横浜市立白幡小

「今日の学習のめあて（学習課題）は～です」―。司会役の児童が口火を切り、横浜市立白幡小学校（永池啓子校長、児童672人）の授業は始まる。グループで話し合い、考えをまとめ、書記係が発言内容を板書にまとめる。こうした授業スタイルは、まさに学級会活動そのもの。各教科・領域などの全ての授業で取り入れ、子ども主体の問題解決的な学習を1年生段階から繰り広げる。

主眼に置くのは、子どもが自ら考え、学ぶ力を付けること。同校では、その力を「自主的学習力」と呼ぶ。教師は、学び方のポイントやまとめの場面で身に付けた力を確認するなど、最低限の支援やサポートに徹する。「学習は自分たちで進めるもの」―。こうした意識の高い子どもたちの学びは、「アクティブ・ラーニング」の一つの形といえる。

「形式」にしないために

「アクティブ・ラーニング」というと、学校現場では話し合い活動やグループ学習などをイメージすることが多い。しかし形式だけを取り入れてもただの活動に陥りがち。それに加え、教師に力がないと学級全体がざわついてくる。

話し合いを進める上で、欠かせないのは「対話力」や「説明力」「質問力」などの力。同校の教育活動で要となったのが、言語活動を活性化させる資質・能力を「ラーニングスキル」としてまとめたことだ。それを教科・領域などを貫く汎用的な力と捉え、全学級で使えるように「やることを決め、全員で取り組めるカリキュラム」の整備を図ったという。

「教師が授業で話し過ぎてしまう」―。こうした課題を踏まえ、第1段階として、1単位時間の学習過程を明確化し、「司会進行表」を作って子どもたちに与えた。そして国語科を中心に、各教科・領域などで司会役を立てて学習を進める授業スタイルを導入。本年度で7年目を迎えた。高学年になると「司会進行表」を手放し、場に応じて判断し柔軟に学習を進めていくような姿も増えた。

これだけの取り組みをしている同校でも、最初は「型」から入っていったという。永池校長は「一人の百歩よりみんなの一歩と、進める上で教師も子どもも手探りにならないよう条件づくりが必要だった」と振り返る。

2面に続く

各校種で多彩なアクティブ・ラーニング

横浜市立白幡小学校　学校全体で授業観変える

1面から続く

取り組みを進める上で、教師にとって重要だったのは従来の授業イメージを払拭させること。「アクティブ・ラーニング」の関連本を読んでも、教師自身も経験がないために理解しづらい部分があったという。そのため、学校全体で取り組むことは不可欠だったとしている。

「アクティブ・ラーニング」について、教師一人一人がきちんと理解しているのか。それを把握する上で、リトマス試験紙のような役割を果たしたのが「指導案の作成」だ。子ども主体の問題解決の思考を把握できていないと、ただの指導事項の羅列になってしまう。そのため、「何の脈絡もないままで、『今日扱うのは、この問題です！』と、教師主導型の授業になってしまう」と、永池校長は警鐘を鳴らす。

しかし、教材研究や発問など、従来の授業づくりで大切にしてきたことは何も変わらない。

子どもたちが協働的に問題解決に取り組む中で、永池校長は「子どもたち一人一人が役割を持ち、多様性を認められるような『心』の部分も育てることが大切」と話している。

白幡小＝☎045・401・4779